

平安漢詩と李白

大野實之助

日本に於ける漢文学の歴史は中国のそれと様相を異にし、中国にあつては詩歌の發生が散文以前にあつたけれども、之と反對に日本に於いては漢詩が却つて漢文よりも後にその起源を發している。懷風藻の伝えるところに依れば、天智天皇の長皇子大友太子の「侍宴」と題する五言四句二首の詩がその嚆矢をなすもので、天智天皇の代にその端を發した日本漢詩は奈良朝に至つて次第に發達し、平安時代に入つては百花繚亂の盛況を現出するのであるが、就中その最も極盛を示したのは嵯峨淳和仁明の頃で、この期を頂点として醍醐天皇の延喜に至るまでが漢詩中衰の時代であり、延喜期に入つて再び盛んとなり、その後は日を逐つて衰微に向うのであった。この辺の事情は既に紀長谷雄（醍醐天皇の侍読延喜中參議を歷任中納言に至る）の「延喜以後詩序」（河世寧の日本詩紀別集所收）に、「延喜以後好んで詩を言ふを知らず。風月徒らに抛ち、烟火棄つるが如し。」と述べ、大江維時（大学頭式部大夫を歴て參議中納言に至る）が「日觀集序」（日本詩紀別集）の中で、「昔弘明天長の世凌雲文華秀麗集有り。其の後百余年間絶えて続かず。天慶の緒宮、徳高く監撫し、学長じ誦該ね、在藩の時より、押近の輩をして風人墨客の律詩を採擷せ

しめ、承和に起りて延喜に泊ぶまで一十人入選、二十卷功を成す。」と語っていることによっても窺ふことが出来る。

弘仁天長期に黄金時代を現出した漢詩が、延喜以後次第に衰微の一途を辿るに至った理由については種々の事柄が考えられるであろうけれども、何と言つても仮名文が発達しそれに伴つて和歌が大いに行われるようになったことを挙げる事が出来ると思う。漢詩を作るには平仄押韻等嚴重な約束があるのに反して和歌にはそのような制掬がなく、心に思うこと感じる物を自由に表現し得るという性格をもつ文学様式であることが、和歌が漢詩を圧して盛んとなった大きな理由であろう。

このように弘仁天長期に極盛の状態を示し、延喜期に中興し、やがて衰微に向う運命をもつ平安漢詩は、その普遍的な性格を挙げるならばそれは唐詩の模倣ということにあり、従つて唐代詩人の影響を多少に拘らず蒙つてゐるであろうことが推想されるけれども、小稿に於いては盛唐時代の杜工部と相並ぶ代表的な詩人李太白の詩と平安漢詩との間に、何等かの関連性があるか、又は否らざるかを考究して見たいと思うのである。

二

平安漢詩と李白との関連性を考えるに當つては、順序として平安漢詩が伝えられている詩集について年代順に一瞥を加えることが、その概況を窺うに便宜であろうと考えられるから、やゝ多岐に亘るけれども、今その概要を記すこととする。我が国に於ける漢詩集の最初をなしている懷風藻は、奈良朝時代の孝謙天皇天平勝宝三年（西紀七五一年）に撰集されているから、この集の成立は桓武天皇延暦十三年（七九四）に行われた平安奠都をさかのぼる

こと四十三年の昔で、この年は唐の玄宗の天宝十年に相当し、李白五十一歳のこととなる。而して懷風藻は大友太子以下作者六十四人詩一百二十篇から成る詩集で、其の全般を概観するに、在野民間人の作は極めて少く僅かに数首あるに止まり、その大部分は在朝有位の人々によって作られている。従つてその内容も臣下が君上の萬寿太平を謳歌するといった類のものが多く、「応製」「応詔」「応教」「応令」等と題したものが少くない。而して表現形式より観る時は、先学のしばし指摘している通り七言詩は、

大津皇子の 述志（七言二句後人聯句二句）

紀朝臣古麻呂の 望雪（七言十二句）

紀朝臣男人の 遊吉野川（七言四句）

藤原朝臣宇合の 在常陸贈倭判官留在京（七言十八句） 秋日於左僕射長王宅宴（七言四句）

丹墀真人広成の 吉野之作（七言四句）

釈道融の 逸題（七言四句）

この七首があるばかりで、他はすべて五言詩であり、就中五言八句が圧倒的に多く、其の数百二十首中七十二首に及んでいる。

奈良朝時代早く懷風藻の成立を見た漢詩壇は、平安朝に入つてその初期即ち嵯峨淳和の頃に極盛の姿を現出したことは既に述べたが、この期に於いては所謂勅撰三集が編せられている。「凌雲集」は弘仁中嵯峨天皇の勅命により小野岑守（平城嵯峨の面朝に仕え官は参議刑部卿に至る）が、菅原清公・勇山文継の兩人とともに桓武の延暦元年（七八二）から嵯峨の弘仁五年（八一四）までの詩を選集討議し、当時の大家賀陽奉年の関を経て成つたと謂われ、

其の内容は作者二十三人詩篇九十二首を包含している。この凌雲集にも「奉和応製」の詩が多く、且つ在朝貴族の詠が多いことは前述の懷風藻と大差ないものであるが、表現形式の面より観る時は五言詩が寧ろ少く、七言詩が多くなっているという点に差違がある。九十二首中五言詩は太上天皇（平城天皇）の賦桜花（五言八句）以下三十五首で、他は七言乃至は雜言の体をとっており、それ等の中で最も多いのは七言八句の形式で、其の篇数は三十二首に達している。

文華秀麗集上中下三卷は凌雲集選録の後四年即ち弘仁九年（八一八）藤原冬嗣が嵯峨帝の勅を奉じ、仲雄王・菅原清公・勇山文繼・滋野貞主・桑原腹赤の五人に命じて選集させたもので、作者二十六人詩百四十八篇を収めている。秀麗集の内容は五言詩が五十首に止まり他は七言詩で、その中で最も多い形式は七言八句で其の数は三十三首となっている。これによって知られる通り秀麗集も亦表現形式に於いては前の凌雲集と傾向を同じくして、八句詩及び四句詩が多くなっており、是れ即ち諸家の既に説かれている通り、唐代近体詩（律詩と絶句）の影響によるものに他ならぬ。

経国集は淳和天皇の天長四年（八二七）唐の文宗太和元年（良岑安世が勅命を奉じ、滋野貞主・南淵弘真・菅原清公・安野文繼等をして編集させたもので、その内容は光仁天皇の景雲四年（この年宝龜元年と改元、七七〇）から淳和天皇の天長四年（八二七）に至るまで五十八年間の作品を集めたもので、その編集の年は凌雲集秀麗集よりも後年ではあるけれども、内容はこの二集よりも前にさかのぼり久しい歳月に亘り、即ち光仁・桓武・平城・嵯峨・淳和の五朝の詩を載せている。この集はもと二十卷あり、作者百七十八人賦十七首詩九百十七首序五十一首対策三十八首を包含していたと謂われるけれども、その完本は伝わらず、現に観ることの出来るのは巻一（賦十七首）巻十

詩九樂府梵門、卷十一詩十雜詠、卷十三詩十二雜詠、卷十四詩十三雜詠、卷二十（策下二十首）が存在するのみで、大約その三分の二を失っている。經国集は單なる詩集というのではなく、文章をも併せ載せており、文選の例にならった総集であることはいうまでもないが、さて現存の詩の部分四卷についてその内容を検討して観るに、卷十に六十首（中一首散逸）卷十一に五十八首卷十三に四十四首卷十四に四十九首合計二百十首の詩篇が見えているが、五言詩と七言詩とは大体に於いて相なればし、その中で八句詩が多く、さまざまな形式の中最も多数を占めているのは五言八句六十首で、之につぐものは七言八句の二十八首である。而して中に雜言体の多くなっているのも注意を要する点で、その数は三十六首に上っており、是れ亦盛唐詩人の古体詩にしばしば見られる長短句錯綜形式の影響であらう。

勅選三集以外の平安漢詩集には田氏家集三卷（島田忠臣）・性靈集十卷（空海）・菅家文草十二卷菅家後草一卷（菅原道真）・扶桑集二卷・本朝麗藻二卷・本朝無題詩十卷・江吏部集三卷（大江匡衡）・法性寺閑白御集一卷（藤原忠通）等の総集又は個人の集がある。

三

以上述べ來った平安漢詩集を調べて見るに、唐代詩人の名が直接わが国人の詩句の中にあらわれているのは比較的少く、中にあって中唐の白樂天のみがしばしば詠み込まれている。例えば、

古今詞客得名多。白氏拔群足詠歌。（本朝麗藻 具平親王「村上第六子」和高礼部再夢唐故白太保之作「七言八句」）
白氏書中收夏部。諸家集裡闕秋詩。（田氏家集 早秋「七言八句」）

風光惜得青陽月。遊宴追尋白樂天。（菅家文章卷二 暮春見南並相山莊尙幽会「七言十二句」）

謳吟白氏新篇籍。講授班家旧史書。（菅家文章卷四 客舍書籍「七言八句」）

久陪蘭省東方朔。再入翰林白樂天。（江吏部集 早夏諸客賀予再兼翰林「七言八句」）

更有菅家勝白様。（菅家後草 醍醐天皇御製右丞相獻家集「七言八句」）

仰慙白樂天。（江吏部集 述懷古調詩「五言二百句」）

詩主樂天老住情。（本朝無題詩卷二 釈運禪山寺早春「七言八句」）

閑詠香鑪白氏詩。（本朝無題詩卷二 菅原在良画障子詠「七言八句」）

白氏古篇説有香。（本朝無題詩卷二 菅原通憲画障子詠「七言二十句」）

かくの如き句が数多く見えており、更に直接樂天の名ではなく樂天の詠になる詩句を引用しているものに至っては、到底枚挙に遑がないくらい数多く見えている。都良香（八四四—八七九）が「白樂天讃」と題する文章の中で、「集七十卷、尽く是れ黄金。」（都氏文集卷三）と言っている通り、当時平安智識人がいかに白氏文集を文選とともに愛好したかを容易に想像することが出来るが、されば中国詩壇の最高峯とも言うべき盛唐時代の李白杜甫の詩が全く顧みられることがなかったのであるうか。白樂天以外の唐代詩人の名で平安漢詩にあらわれているものには賦玄吟興不如君。賈馬後身元白群。（扶桑集源英明重次群字「七言八句」）吟詩便是長生計。不信應尋元白間。（扶桑集源英明後賦雲字「七言八句」）等を觀ても判る通り白樂天の友元稹があり、其の他王維（扶桑集橋在列の重奉和「七言八句」）駱賓王（菅家文章夢阿滿「七言二十八句」）等があるが、李白杜甫に觸れているところは殆んど見当らない。

本朝無題詩卷五に載せられている源経信の七言十六句の詩中に、「自迎季白感方通。」とある句の「季」の字に新

校群書類従本では「李敷」と注記し、「季白」は「李白」の誤りではなからうかと疑っているけれども、しかしその詩全体の意味から推して此の語は季秋即ち九月をあらわしているものでなければならぬと思われるから、この「李白」の誤かも知れぬと疑っていることが却って誤った考え方のように考えられる。

平安漢詩の中李白を語っているものが殆んど見えないけれども、さればと言って平安漢詩人の中に太白文集を読む者が絶無であったとは考えられない。白氏文集が平安智識人の常識として広く普遍的に人々に愛読されていたのに比較する時は狭い範囲の人々に局限されていたであらうけれども、やはり太白文集も或る程度読まれていたであろうことが想像される。それで私は単に直接的な詩の用語のみに考察の根拠を置かず、同時にその詩語の裏面にひそむ内容即ち詩想の面にも或る程度重点を置いて、太白詩と平安漢詩との関連性を推究しようとするのであるが、この問題について私は先ず平安詩人の中から弘明天長期の作家であるとともに博学であった空海上人及び延喜期にその晩年を過ごした菅原道真の二人を取り上げて考えて見ることとする。

四

空海は延暦二十三年（八〇四）五月十二日桓武天皇の命を拜して入唐し（性靈集序注文）、唐の都長安に到り、代宗の師事したといわれる高僧青竜寺の大德慧果阿闍梨に見え、仏の教を受けたのであった。この空海が唐土に渡った年は徳宗の貞元二十年で李白の歿後四十一年、白樂天三十三才の時に相当する。かくして空海はかの地に於いて学ぶこと三年に亘り、平城天皇の大同元年（八〇六）に帰朝したのであるが、親しくかの地に学んだ空海は単なる仏教の徒であるというに止まらず、其の学ぶところが極めて博く経史にわたり、且つ風雅の道にもよく通曉されている。

たことは、其の述作に「文鏡秘府論」「文筆眼心抄」があり、詩文集に「性靈集」のあることによつても、十分に窺うことが出来る。空海の詩は性靈集に收められ、経国集にも南山中新羅道者見過一首（七言）過金心寺一首（七言）留別青童寺義操阿闍梨一首（七言）在唐觀禪法和尙小山一首（七言）入山興一首（雜言）の五首が收められており、それ等諸篇の思想的根柢が仏教思想にあることはいうまでもないことであるけれども、しかし空海の詩はたゞに仏教思想に徹しているのみではなく、その詩想は彼の博學に基礎を置く儒學的また老莊的色彩を多分に含むものであった。この儒道仏三教の思想の中で、道家の性格に於いて李白と淺からぬ関連性をもつことが想われる。李白の詩が多く老莊的色彩を包含していることは周知の事柄である。假令李白の思想的基底をなすものが儒教的な正義觀を濃厚に含有するものであったとしても、今茲に私の述べた事柄を証するに足ると思われる空海の詠「遊山慕仙詩」（五言一〇六句性靈集卷一）の中から実例を取り、太白の詩句と比較して見よう。

（必ずしも詩句の用語が完全に一致しているというのではないけれども、それ等の詩境に於いて強く共通性の認められるもの。）

遊山慕仙詩

李白の古風五十九首

一身独生歿。電影是無常。 容顏若飛電。時景如飄風。（第二十八首）
 老聃守一氣。許脫貫三望。 仲尼欲浮海。吾祖之流沙。（第二十九首）
 子晉凌漢拳。伯夷絕周梁。 幸遇王子晉。結交青雲端。（第四十首）
 松柏摧南嶺。北邙散白楊。 詎知南山松。獨立自蕭颺。（第四十七首）
 鸞鳳梧桐集。大鵬卧風床。 鳳凰鳴西海。欲集無珍木。（第四十九首）

吾視摩天飛。九萬方未已。(第三十三首)

こゝに示した数例に徴しても知られる如く、空海の詩には用語の上に完全に一致していないにしても、その内容即ち詩想に於いて李白の詩と相似たところを隨所に見出すことが出来る。彼の地に学んだ空海は典籍の渡来を待つまでもなく、盛唐時代を風靡した李白の詩集を彼の地で読んでいたであろうことが容易に想像される。更にこのことは空海の「入山興」^(註1)と題する雜言体の一詩によって一層深く感じさせられる。李白は古体詩にすぐれ其の篇什の中に長短錯綜形式即ち雜言体の詩を多く作っているが、それ等の中の一首「將進酒」^(註2)(二十八句)の詩で、「君不見。黃河之水天上來。」「君不見。高堂明鏡悲白髮。」と詠じており、空海の「入山興」詩に於いては、「君不見。君不見。京城御苑桃李紅。」「君不見。君不見。王城城裏神泉水。」と叙しているが、この「入山興」の詩句のような措辭が李白の詩語に対して單なる暗合であると観ることが出来るであらうか。太白詩を精読した人にしてはじめて為し得る句ではなからうか。空海は仲磨の如く唐朝に仕えて官吏となつたものではないが、彼が三年に亘る唐土の生活の間には多くの詩人文人と交渉をもつたものと思われ、それ等唐人の作になる贈答の詩文が空海によって日本に持ち歸られ、性靈集の卷八から卷十に至る三卷中に收められていたと謂われるが(性靈集注文)、それ等は早く散逸して伝わってはいない。之等のことを参考推究するならば、空海が太白集を読んでいたのであることも推想される。

こゝに取り上げた「遊山慕仙詩」及び「入山興」の二首以外にも「九想詩」九首と「詠十喻詩」十首(ともに性靈集卷十日本詩紀卷十二)の如き、李白の古風(特に第十八首第二十八首)と内容の面から相似性の濃厚であると思われる篇がある。空海が古体詩を尊重していたことは、その言葉に、「詩を作る者は、古体を学ぶを以て妙と爲す。」

(敕使屏風書了表 性靈集卷三)と述べているところを以てしても窺うことが出来、この古体詩を尊ぶ思想は、李白の詩道に於ける尙古乃至は復古思想と相通うものがある。

五

前項に於いては空海と李白とについて兩人の詩句をとってその関連性を推究して来たのであるが、次には菅原道真について考察して見たいと思う。道真は仁明天皇の承和十二年(八四五、唐の武宗の会昌五年)菅原是善の第三子として生れ、幼少の時から學問を好み博く經史を學び、長ずるに従つて詩文をも巧みに作り、諸官を歴任して右大臣となり左近衛大将を兼ねるまでに至つたが、晩年醍醐帝の延喜の初讒言に遇い、太宰府権帥に流謫されたことは広く世に知られている事實である。かれ道真が詩人としての最初の作は、「月夜見梅花」と題する五言四句の詩で、この詩の出来たのは文徳天皇の斉衡二年(八五五)道真が年十一歳の時であつたと謂われ、以来道真は多くの詩を詠み、それ等は皆菅家文章同後草に收められ今の世に伝えられている。

道真の詩を通觀するに、その博學が基因となつて儒教的道義觀に徹し、一面老莊的な思想をも含み、又晩年となるに従つて仏教的な色彩も濃厚になつてゐるが、^(註3)彼が生涯を通じての詩生活のうちに於いて樂府に類する詩篇をしばく詠んでおり、その數例を挙げるならば、次の如きものがある。

賦得折楊柳五言十二句(菅家文章卷一)

有所思七言三十六句(文章卷二)

行春詞七言四十句(文章卷二)

路逢白頭翁雜言五十二句（文章卷三）

春日獨遊三首七言四句（文章卷四）

春詞二首七言四句（文章卷四）

漁父詞七言四句（文章卷五）

これ等諸篇の修辭及びその中に含まれる詩想に太白のそれと相似たところがある。太白が樂府の作家として獨特の存在を示していることは、樂府の作品の多く今に伝わっていることによっても知ることが出来る。太白の樂府は彼の詩集分類補註本卷三に遠別離以下三十首、卷四に關山月以下三十七首、卷五に門有車馬客行以下四十四首、卷六に谿白馬以下三十八首、すべて百四十九首が見存している。

こゝに道眞の詩が樂府的な面に於いて李白の詩と相似性のあることを述べて来たが、更にこのことを一層感じさせられることは、道眞の詩に、「戊子之歲八月十五日夜陪月臺^{（註。）}」というのがあり、この篇を李白の樂府詩「子夜吳歌」の第三首と對比して見る時、一は七言他は五言で文字數に於いて異ってはいるけれども、兩篇の詩の表現している環境は季節的に秋であり、時間的には夜であり、更に天空には相ともに明月が懸り、且つ秋風が吹き渡っているというのであつて、直接用語の上にも「秋氣」と「秋風」「明月孤輪」と「一片月」「一種」と「一片」「風情」と「玉關情」「萬戶」と「萬戶」等極めて一致又は近接しているものとなつてゐる。道眞がこの詩を詠むに當つて先ず彼の腦裏に浮かんでゐたものは、李白の「子夜吳歌」の一篇ではなかつたであろうか。初唐四傑の一人駱賓王の詩を読んで暗誦していた（文章卷三夢阿滿と題する篇の中に讀書誦帝京篇という句が見えている。）道眞が李白の詩集を読まぬ筈がなく、罪なくして僻遠の地に流謫されるという点に於いて李白とその境遇を同じくする道眞に

李白の風雅がある程度影響していることが想像されるのである。又道真の作中に「不出門」^(註8)「聞雁」^(註9)等があり、更に長篇「叙意一百韻二百句」の中では、「長沙沙卑濕。湘水水湍湑。」の句を詠んでおり、これ等は李白の絶句「与史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛」^(註10)（太白詩集卷二十三所收）とその詩境が極めてよく似ている。

六

上に於いて菅原道真の詩と李白の詩との相似性について説述して来たが、猶これに類する平安漢詩人の樂府的傾向をもつ諸作にして而も太白の樂府と多かれ少かれ関連性のある（特に閨情の面に於いて接近している）と思われるものは、枚挙に遑がない程多數あるが、今それ等の中からその一斑を例示するならば、次の如き諸篇がある。

長門怨（文華秀麗集）嵯峨天皇 折楊柳（同上）同上 塞下曲（經国集）同上 奉和巫山高（同上）有智子内親王 奉和関山月（同上）同上 奉和聖製春女怨（凌雲集）小野岑守 奉和親佳人陷歌御製（同上）同上 奉和春閨怨（文華秀麗集）菅原清公 奉和王昭君（同上）同上 奉和塞下曲（同上）同上 奉和関山月（同上）同上 王昭君（凌雲集）滋野貞主 尋和関山月（經国集）巨勢識人 奉和長門怨（同上）同上 奉和巫山高（經国集）同上 王昭君（和漢朗詠集）大江朝綱

勿論これ等諸篇の中にも直接李白のことを語っている語句を見出すことは出来ないけれども、しかしそれ等の詩の表現を通じて感得することの出来る詩情に於いて、またその内包している詩想に於いて之等は唐詩の流を汲んでいることが明らかであり、且つ唐代樂府に關しては李白がその代表作家として重要な存在であることを想う時、兩者の間に影響關係のあるであろうことが推想されるのである。このように考えて来る時李白の詩と平安漢詩との関連

性を見逃すことが出来ない。

七

以上平安漢詩が伝えられている典籍について概観し、それ等の中に載せられている多くの詩篇と盛唐詩人李白との関連性がいかなるものであるかを考え、延暦弘仁期の博識空海及び貞観延喜期の文人道真の二人を特に取り挙げ、併せて他の漢詩人にも觸れて来たのであるが、要するに唐詩と平安漢詩との影響關係については、普遍という点からするならば李白は白樂天に固より及ばないであろう。何故白樂天の詩が平安詞人に普遍化し李白の詩がそれに比して狭い範圍に局限されているかの理由については深く考究するまでもなく、世に所謂元輕百俗の語が周知されていることによっても判る通り、白樂天の詩が平易にして世俗一般人に比較的容易に読解されるものであるのに對して、李白の詩には歴史性が多分に含まれ難解な部分が多いという点に存すると考えられる。而して白樂天は太平広記によれば仙の部類の人として伝えられているにも拘らず、彼の詩境は猶現實の世界をありのまゝに表現した部面の多いのと趣を異にし、李白の詩には非現實的即ち理想の世界を表現した夢幻的な部分の多いことも亦、李白の詩をして難解ならしめている一つの因となっており、此の兩人の詩風の差違が、わが日本に渡來して一は普遍的に平安智識人にもてはやされ、他はそれ程までに一般に広くは愛読されるに至らなかったのであらう。しかしかくの如く普遍性という点に於いて李白は白樂天に及ばないと言っても、平安風雅人に李白の影響が無かったというのではなく、用語の上に直接に李白を語るものは殆んどないと言っても、私は猶その詩情の上にまた詩想の面に、李白の風雅が或る程度平安詩人に影響していることを想うのである。

〔註1〕問師何意入深寒。深嶽崎嶇太不安。上也苦下時難。山神木魅是爲魔。君不見君不見。京城御苑桃李紅。灼灼芬顏色同。一開雨一散風。飄上飄下落園中。春女群來一手折。春鷺鵲集啄飛空。君不見君不見。王城城裏神泉水。一沸一流速相似。前沸後流幾許千。流之流之入深淵。入深淵轉去。何日何時更竭矣。君不見君不見。九州八島無量人。自古今來無常身。堯舜禹湯与桀紂。八元十乱将五臣。西嬌嬖母支離體。誰能保得萬年春。貴人賤人摠死去。死去死去作灰塵。歌堂舞閣野狐里。如夢如泡電影賓。君知否君知否。人如此汝何長。朝夕思思堪斷腸。汝日西山半死士。汝年過半若尸起。住也住也一無益。行矣行矣不須止。去來去來大空師。莫住莫住乳海子。南山松石看不厭。南嶽清流憐不已。莫慢浮華名利毒。莫燒三界火宅裏。斗藪早入法身里。(性靈集卷一)

〔註2〕君不見。黃河之水天上来。奔流到海不復廻。君不見。高堂明鏡悲白髮。朝如青絲暮成雪。人生得意須盡歡。莫使金樽空對月。天生我材必有用。千金散盡還復來。烹羊宰牛且爲樂。會須一飲三百杯。岑夫子丹丘生。將進酒君莫停。与君歌一曲。請君爲我側耳聽。鐘鼓饌玉不足貴。但願長醉不願醒。古來聖賢皆寂寞。惟有飲者留其名。陳王昔時宴平樂。斗酒十千恣譔譔。主人何爲言少錢。徑須沽取對君酌。五花馬千金裘。呼兒將出換美酒。与爾同銷萬古愁。(李太白詩集卷之三)

〔註3〕除目明朝丞相家。無人無馬復無車。況乎一旦薨已後。門下底看枳棘花。(菅家文章卷二 春日過丞相家門)

〔註4〕有迹崇尼父。無爲拜老君。春秋三十卷。道德五千丈。口誦竊倚後。心耽到夜分。二經充晚學。那問旧丘墳。(菅家文章卷三 說書)

〔註5〕古寺人蹤絕。僧房挿白雲。門当秋水見。鐘逐曉風聞。老臘高僧積。深苔小道分。文殊何处在。歸路趁香薰。(菅家文章卷二 山寺)

〔註6〕詩人遇境盛何勝。秋氣風情一種凝。明月孤輪家萬戶。此間台上是先登。(菅家文章卷一)

〔註7〕長安一片月。萬戶擣衣聲。秋風吹不尽。總是玉關情。何日平胡虜。良人罷遠征。（李太白詩集卷之六）

〔註8〕一從謫落就柴荆。萬死兢兢踣躑躅。都府棲纒看瓦色。觀音寺只聽鐘聲。中懷好逐孤雲去。外物相逢滿月迎。此地雖

身無檢繫。何爲寸步出門行。（營家後草）

〔註9〕我爲遷客汝來賓。共是蕭蕭旅漂身。欹枕思量歸去日。我知何歲汝迎春。（營家後草）

〔註10〕一爲遷客去長沙。西望長安不見家。黃鶴樓中吹玉笛。江城五月落梅花。（李太白詩集卷之二十三）